

決断と覚悟の時

済生館 病院事業管理者 貞弘 光章



明治時代、当院で医師兼
医学校教頭として活動し
ていたオーストリア医師
ローレツ博士像

今年の冬は、昨年の記録的大雪から一転、不思議なくらい雪が少なく過ごし易い季節を過ごすことができました。診ます会の先生方には、常々、済生館への格別の御高配と御支援を賜り心より感謝申し上げます。

イラン攻撃に始まったホルムズ海峡の問題など急激な国際状況の悪化が、物価高や、エネルギー高、医療材料高、医薬品高に直結しそうで、先が全く見通せない状況にあります。さらに、この数年来の人件費アップと諸物価高騰による経費の増加で医療費用が急増し、病院収益は大きくマイナスとなっている現状の中で、来たる令和8年度の診療報酬改定で提示された3.09%の増額には、賃上げや物価高対応、救急医療や全身麻酔件数の増加など、急性期医療を担っている中～大規模病院にとっては弥が上にも期待が膨らみますが、金額の規模感は小さく、赤字の経営状況の払拭には程遠いところです。

さらに、「新たな地域医療構想」では、「治す医療」から「治し支える医療」への転換の中で、入院一外来（診療所）一介護福祉一在宅の縦の連携として、急増する高齢者救急と在宅医療（特に単身高齢者）への対応が主眼となっており、急性期から包括期病床への転換と病床数適正化へと医療機関を誘導しているように見えます。

その中で済生館が、これまで通りの急性期機能を有し同程度の病床数を維持していくためには、入院患者数の確保（病床稼働率の向上）と同時に長期入院患者の早期退院の促進（在院日数の適正化）、入院中の重症度医療看護必要度の確保（質の確保）が必須であり、まさに、病床を新規の患者で常に回転させ、かつ、高密度の医療を提供しなさい、という困難な命題に対して、職員一同の「決断」と「覚悟」が必須になる時期が到来したと言えます。

「真っ当な医療」を提供してさえいれば地域から感謝され、経営も安定する時代は遠く過ぎ去り、常に状況を監視し適切な対応を行う司令塔を有する、緊張感を持ったピリピリした時代となりました。

この難局を乗り越えるためには、診ます会の先生方からのご支援とご紹介が重要であり、これが済生館の強みとなっています。

今年度も研修医採用は3年続けてフルマッチとなり、10人の研修医と、加えて3名の後期研修医も迎えております。医師数も100名を超えました。若手医師が増え、活気のある済生館であることが朗報です。

引き続きのご支援を何卒宜しくお願い申し上げます。

【地域医療機関の先生方へ】

山形市立病院済生館 眼科 診療のご紹介

診ます会の先生方におかれましては、日頃より多大なるご支援と連携を賜り、厚く御礼を申し上げます。本稿では令和8年2月19日診ます会講演会で発表させていただいた内容を一部抜粋し、御紹介させていただきます。

眼科 科長 西川 将平



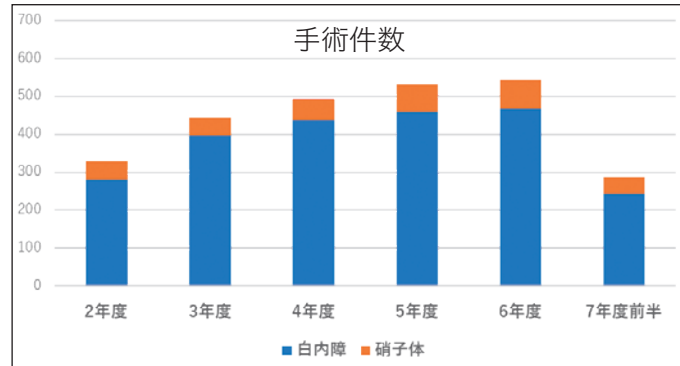
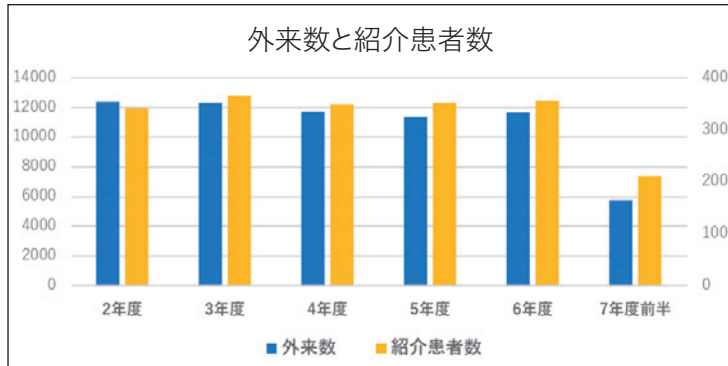
はじめに

山形市立病院済生館眼科は、地域医療の中核を担う専門診療科として、最新の医学的知見と高度な手術技術に基づいた質の高い眼科医療の提供を目指しています。

当科では、一般的な眼疾患から専門性を要する網膜硝子体疾患、緑内障、難治性白内障まで、幅広く対応できる診療体制を整えております。近年の診療実績を振り返りますと、年間外来患者数は約12,000名に上り、先生方から

の紹介患者数は年間約350名に達しております。地域医療機関との緊密な連携のもと、多くの患者様をお引き受けしております。

手術件数につきましても増加傾向にあり、年間500件程度の手術を施行しています。以下に、当科における主な診療の柱を3つご紹介いたします。

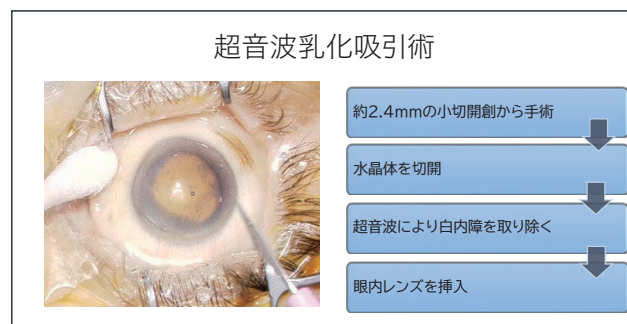


1つ目の柱 白内障手術

当科の診療における大きな柱の一つが、白内障手術です。白内障は加齢に伴う生理的変化の側面が強く、60歳以上の多くの方に見られる疾患です。近年の知見では、視力低下と認知症の発症リスク、ならびに転倒による骨折リスクには密接な相関があることが示されています。視力の維持・回復は、単なる「見え方の改善」に留まらず、患者様の健康寿命の延伸およびADLの維持において極めて重要な役割を果たします。

2.4mmの小切開創から超音波機器を挿入し、混濁した水晶体を低侵襲に破碎・吸引後、眼内レンズを挿入します。手

術時間は通常15分程度と短く、局所麻酔下で行われるため、お身体への負担を最小限に抑え、早期の視力回復と社会復帰を目指しています。



2つ目の柱 緑内障の早期発見と低侵襲手術(MIGS)

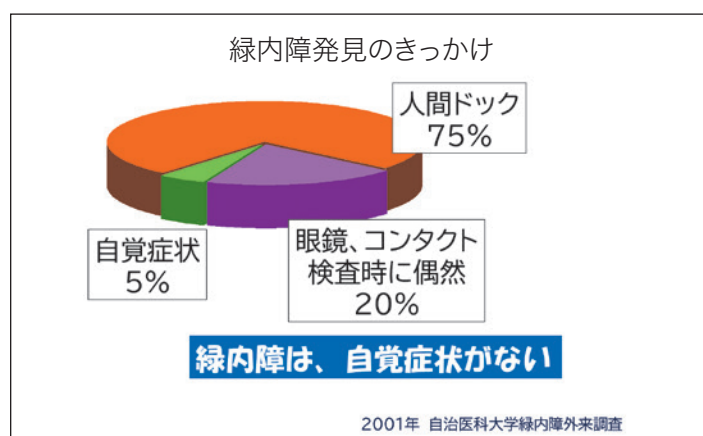
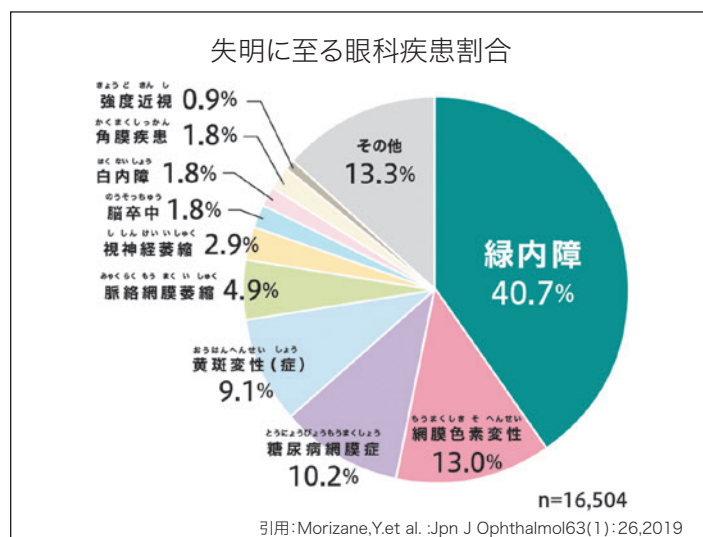
日本人の失明原因第1位である緑内障の管理にも注力しております。多治見スタディによれば、40歳以上の日本人の約20人に1人が罹患しているとされますが、自覚症状が乏しいため、約89%が未治療の潜在患者と言われていいます。一度失われた視野は再生できないため、人間ドックや先生方による日常診療での早期発見・早期紹介が不可欠です。

当科では、点眼薬による眼圧管理を基本としつつ、症例に応じて低侵襲緑内障手術(MIGS)を導入しています。

手術の種類は

- ・ アイス TENT (iStent) 挿入術
- ・ マイクロフックトラベクトミー の2つがあります。

これらは従来の濾過手術に比べ術後の回復が早く、合併症のリスクも低減されています。病期の進行を抑制し、生涯にわたって視機能を維持するための適切なタイミングでの介入をご提案いたします。



3つ目の柱 網膜硝子体手術

糖尿病網膜症、網膜前膜、硝子体出血、黄斑円孔、網膜剥離といった網膜硝子体疾患に対しても、手術を行っております。手術器具のスモールゲージシステム(25Gシステム)や、術中視認性を高める広角観察システム、さらにはデュアルブレードカッターによる効率的な硝子体切除を実践しております。

これにより、以前は予後不良とされていた増殖糖尿病網膜症などの難症例に対しても、安全かつ低侵襲な手術が可能となりました。術中・術後の炎症を最小限に抑えることで、患者様のQOL向上に寄与すると考えています。

結びに: 地域連携の更なる深化を目指して

目は「情報の8割を得る」と言われるほど、個人の生活の質に直結する重要な臓器です。私たちは、患者様一人ひとりのライフスタイルや併存疾患に寄り添った最適な医療を提供することを使命としております。

当科での急性期治療や手術が終了し、病状が安定した患者様につきましては、再び先生方のもとで継続的な管理をお願いするという逆紹介の推進にも取り組んでおります。山形地域の皆様のために、日々研鑽を積み、先生方にとって信頼できるパートナーでありたいと考えております。

眼に関する不安な症状や、精査が必要な症例がございましたら、どうぞお気軽に当科へご相談ください。今後とも、何卒よろしくお願い申し上げます。

